
セリオートの亡霊

佐伯夜世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セリオールズの亡霊

【Nコード】

N3040I

【作者名】

佐伯夜世

【あらすじ】

ねえ、ライネ。嘘をつきすぎた人は、どうなってしまうと思う？

セリオールズ伯爵家の、最期。ドラッグで気が狂った伯爵は、妻をナイフで刺し殺し、次男を谷底へ突き落とした。そして、伯爵も飛び降りた。三週間前、伯爵の妻に奴隷市で買われた、たった一人の使用人 エリックは、軍の警察部と解雇されたほかのメイドたちに連絡を取ろうとしたところをセリオールズ家の長男 ケインに連れられ、事態が収まるまで身を隠していた。愛する母親と弟を

父親に殺された長男は苦しみながらも毅然とした態度で振舞い、使用人はそんな長男を慰め不幸な彼の身内として受け入れられた。可哀想なふたりが事件を契機に、身分を捨て、支えあいながら生きていく。

……はず、だった。

偽りの少年をめぐる、絆の物語。

初めての作品です。がんばって書くので、よろしく願います。

序章 Those Stories

純白のクレマチスが彼の足元に無数に広がっている。少年はとある日、ひとりでその場所へ赴き、真っ白な花びらから来る太陽の照り返しを浴びながら佇んでいた。

「…僕は、どうして生まれてきたのだろうか」

不意に自分の口から出てきた言葉を頭の中でめぐらせてすぐ、彼はその発想自体がまずいような気がして、しかし一度出てきてしまったものを止めることはなかなか難しく、駄目だ駄目だ　心の中でそう唱えながら首を振り、溜息をついてうなだれる。どうやら、そういつたことを頭の中でめぐらせ始めると、すぐに悪い方向に嵌ってしまう癖があるようだ。どんなに考えても、自分の根源なんてものは見つかるはずがない。だからといってどうすることもできなくて、結局自分は一体どうしたいのかということすら、判らなくて　そう、それも、いつものこと。

「君たちは、僕なんかよりずっと強いね。強くて、綺麗で、生き生きしている」

エリックは足元の花々に微笑みかける。眩い純白のクレマチスたちは単に光合成に夢中なだけのはずなのだが、今心に影を落とすその少年から見ると、咲き誇る一輪一輪の美しさには、どんな闇も跳ね返してしまいそうな強ささえ感じられるのだった。

彼についての真実を知る者は、この世界にいったいどれ位いるだろうか。彼にとつて、自分自身を偽り続けることこそが日常で、その事実に対する悪気といったものは当の昔に消えている。つらいことも人並みにあるが、現状には大分慣れてきているつもりだ。定められた複雑な設定のせいで彼自身も何が嘘で何が本当なのか混乱して

しまうことや、今日のように、不安定な自分の存在に悩まされることも たまに、ある位で。

世界はひとりの少年の事情など目もくれず、今日も変わらず回る。時間というものは全ての人類にどこまでも平等で、どこまでも強制的だ。その中で立ち止まることは許されない。許されないのに、ふと一人になって考えてみると困ったことになるのだ。そういう時彼はいつも、悩み、うなだれ、適当に納得させて、忘れる。いや、忘れたつもりになって、一度終わる。

隣の国では、まだ戦争が続いているのだろう。軍は必要以上に兵を欲しがり、育った子供たちを少しずつ切り崩して戦場へ連れて行く。揺らぐ世界の中で、少年はたったひとり、自分の偽りを守り続けていく。こんな嘘つきは、どこを探してもいないだろうな そんなことを思いながら。

「うっん…もしかしたら」

少年と同じように偽り続ける日常をもつ人は、世界に 彼が思っている以上に、居るのかもしれない。しかし、そんな彼ら総てが一生涯硬く口を結び続けるなら、真実が明らかになることなど無く、嘘は嘘と認識されないまま消えていくだけだ。

結局、本当のことなんてなにも判らない。 「本当」が本当にあるのかも、判らない。いつのまにか生まれたいくつもの「嘘」たちは、誰にも語り継がれないままそれぞれの終焉へと駆けてゆく、のかもしれない。

「君は、これから、どうしたい？」

いつか聴いたラジオの問いかけを、繰り返して呟いてみる。答えが返ってくるはずなどなく、ひゅうと風がひと吹きした。乱れて眼鏡の上にかかった髪の毛を払おうと手を伸ばしたとき、木々の間から見えた空がとても綺麗で、少年は思わず眼鏡を外してそれをじっと見つめた。

世界はひとりの少年の事情など目もくれず、変わらず回り続ける。平等で強制的な時間の中で、彼は今日も、生きている。

「僕は、これから」
セリオーズの幽霊は未だ姿を現さず、遠くで彼を待っているだけ。

第一章 伯爵家の事件（1）

変化というものは、自分が思っていたよりもずっと簡単に起こっていることが多い。それはひとり拒んでも変えることのできないよ
うな、どこに眠っていたのかわからない大きな力によって突如発動
し、時には思ってもいなかった大切なものを奪い去るのだ 例え
るならば、この事件のように。

「現状は」

「広間で殺された夫人を搬送しました。伯爵は西の谷で飛び降りた
模様。そこから見つかったブーツのサイズと、周辺の形跡からして
おそらく、次男エルシス・セリオーズも そこへ突き落とされた
とみられます。伯爵のクスリは……」

「キットンからセリオーズ卿が隠していたケシと幻覚性のあるキ
ノコも発見されたそうだ。おそらく複数の麻薬を定期的に服用して
いたと思われる」

「相当、きてますね」

「ああ。まったく……“栄光のセリオーズ一族”の末路か、これが……
とある貴族の邸宅。その庭で二人の軍人がするやりとりは、ケイ
ン・セリオーズしか知らない、彼の企てたシナリオ通りのものとな
っていた。そしてこの後すぐに彼、ケイン・セリオーズとその弟、
エルシス・セリオーズが、寝室で隠れていたのを保護されることと
なることも、また彼の承知のこと。それも、少しずつ偽りをもちな
がら。」

「少年たちを保護しました！長男、ケイン・セリオーズともう一
人……マリア・ジゼルから買われて来た、使用人の少年だそうです」
待つてました、と言わんばかりに続くシナリオ通りの大人たちの
動き。少年二人を発見した軍人は高らかに報告し、庭にいる上司た
ちの元へ二人を連れてきた。

「ケイン……僕、どうすれば……」

エルシスは軽く目をこすった後、ケインの袖を小さくつまむと、聞き取れるか聞き取れないかの細々とした声で彼に尋ねる。

「大丈夫だよ、エリック」

ケインはエルシスの小さな声とは裏腹に自信満々に、しかしあくまで「両親と弟が死んだ」という動揺をもったような演技を含みながら応えた。すべてに、理由があった。彼のシナリオ通りに進むこの事件の全てに。

エルシスがエリックと呼ばれるようになったのは、今から約五年ほど前からだ。エルシスにとって彼自身の名前が女のような、彼曰く「根性なしの響き」に聞こえるような気がしてから、少年は断じてケインに「エリックって呼んで」を言い続けた。おかげで兄であるケインにとって、エルシスがエリックであることにおいて不都合なものは何も無く、さらにその呼び名は二人の間だけのものだったので、偽名にするにはもってこいの名前だった。

「なぜこのようなところにジゼルの子供が？間違いないのか」

「あの、エリックは…こいつは、うちの使用人です。三週間ほど前に、ジゼルで奴隷として売られていたところを…あの…母上が哀れんで連れてきたんです」

母親を想いながら語る息子を演技するケイン。エリックはケインが演じる息子像を、ただただ啞然と立ち尽くして見ていた。

「その瞳の色、確かにカルサトにジゼルのものが混ざっている…間違いなさそうですね」

「そのようだ。二人を、ひとまず安全なところへ連れて行け」

「はっ」

第一章 伯爵家の事件(2)

「うーん、やっぱりよく前が見えないな」

応接室のソファに腰掛けたエリックは、彼とケイン以外に誰もいなくなっただことを確認してから、視力の落ちた瞳を注意深くこすった。

「寝起きの顔だったよ、ほぼ糸目」

「あはは…」

ケインが軽くエリックをからかう。それに苦笑するエリック。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫。しばらくしたら慣れるだろうから」

「そうか」

「これから、どうなっちゃうんだろ。…僕ら、どうすればいいんだろ」

ケインの企ては、エリックが聴かされた限りでは本当にそのままの流れをたどった。エリックにとって、エルシス・セリオーズが「生きている」のか「死んでいる」のか、違いがどれほどの意味を持っているのか分からなかったが、その違いはケインからすると相当重要なものらしい。何にしても、捏造された事件の結末は面白いほど良くできていた。

「エリック」

「何、ケイン」

「何日かしたらクロツカさんのところに行くことに決まったよ。あのひとなら、きっと悪いようにはしないだろうから。それと…エリック、何度も言ってる本当に申し訳ないけれど、お前は今日から、セリオーズ家を語ってはいけないよ」

「……でも、ケインは」

エリックはケインに尋ねる。決してケインを見ず、無意識に遊んでいた指をじっと見つめながら。

「大丈夫だって、こうなってしまう運命だったんだ。多分。お前に

も迷惑かけることになってしまつて……ごめんな」

エリックの心配事はケインのことだけではなかった。自分がエルシス・セリオーズではなくなるのなら、今度は何になればいいのだろう。与えられた名前はほとんど今までどおりだが、家も変わつて、身分もきつと……変わつてしまふ家の称号を剥奪されてしまつたら、二人はただの「みなしご」となる。それなら一人、セリオーズでなくなつた僕は、これから称号を「剥奪される」ケインとどう付き合つていけばいいのだろう。そんなことを、考えずにはいられなかった。

そしてそれはケインもよく知っていたことだろう。よつて

「ううん……それは僕が口出しできることじゃないし、これも、僕の仕事だよ」

こつ言うことが、今は一番良いのだろう、きつと。

そんなエリックを見て、ケインは哀しそうに「ありがとう」と、ささやいた。

第一章 伯爵家の事件（3）

クロツカ・ベルサーシュは、今のところカルサートルアベリアの中で、ケインの作り出した計画の全てを知る唯一の理解者だ。数年前にセリオール家でメイドをしていたフィアツカ・ベルサーシュの妹で（フィアツカは今 MARIA・ジゼルの乳児院に派遣されており、戦争のため帰国することができない状態である）年齢は不詳である。事件の一週間後、二人はクロツカの元へ引き取られることとなるのだが、エリックもケインも、彼女の事というのは、フィアツカから電話で聞いた話と、出発の二日前に手紙で送られてきた住所くらいしか知らされていなかった。そもそもエリックはフィアツカとすら直接の関係が無かったため、彼にとってクロツカはほぼ赤の他人に近い存在だった。

唯一の理解者を、理解される側の二人が全く知らないという馬鹿げた話ではあるのだが、彼らに頼れるものはそれくらいしか無く、頼れるものを作らない限り生き残ることはできない。こうするしかなかったことが、ケインの計画の落とし穴だったと言える。

「荷物はまとまったか？エリック」

準備をしているエリックの部屋の扉がノックされ、ドア越しに声が聴こえる。エリックはすぐにドアを開けると出発の準備を終えたらしいケインが、小さな鞆と彼がいつも大切にしていた鉢を抱えて立っていた。

「本が多すぎて、まだ少し悩んでる」

「重たくしすぎるなよ」

「うん：自分の荷物なんて、ぜんぜん無いものだと思ってたけど、『エルシス』のものが多くて…ケインは、それだけでいいの？」

「ああ。この家に惜しむものも、大切なものも特に見つかからないから」

「そっか」

「もうすぐ馬車が来るから、早くな」

「はい」

エリックは本が好きだったが、特に植物学の書物がお気に入りだった。本で読んだ、見たことの無い薬草や花々を、近くの森や（表面上彼と彼の父親が落ちて死んだことになっている）西の谷まで行って探したものだ。

遠くから馬車が近づいている音が聞こえる。事件の数日前から、人通りやざわめきがほとんど消えていたセリオーズの屋敷に、久しぶりに音が響いた。

「よし、まとまった」

「エリックー！馬車が来たぞ！」

「はい」

荷物をかっいで、玄関の広間へ急ぐ。階段の踊り場からケインを見つけて、「今行くよ」と言いたくなかったけれど、急にエルシスは足の取りを緩めた。ケインが広間の奥に飾られた写真をじっと見つめていた。ケイン、彼の母親、父親、そして、『エルシス・セリオーズ』。彼を残して、家族は皆消えていった。きつとケインにとつて、惜しむべきものは形のあるものではないのだろう。そして

彼は一つの思い出として、唯一形のあるこの家を置き去りにしていくのだろう。そうすることが、彼がケイン・セリオーズであるという証拠になるのなら、彼がそれで満足するのなら、かまわない。エリックにはまだよく分からなかったけれど、家族とは、兄弟とはきつとこうして、相手を認めるべきものなのだ。

「おまたせ、ケイン」

「あ、…遅いぞ、ほら、もう出る時間だ。乗り込もうか」
「うん」

出発は早朝だった。朝日が昇ったばかりの時間帯。まだ低い位置にある太陽が、幾重もの空気中の反射を超えて、まっすぐにオレンジ色の光を送り込む。白い壁紙がドアを開けた瞬間に燃えるような橙に変わり、たった二人の旅立ちを惜しむかのごとく見送る。それは、

ひどく哀しい色だった。

馬車で北東へ、数時間。太陽はすでに高いところへ。馬車に揺られ、セリオーズというひとつの「世界」を抜けて外の世界に出た時、彼

エリックが知ったものは、彼の無知のレベルと、戦火や貧困の絶えないこの時代の過酷さだった。知っていたけれど知らなかった現実をぶつけられて、やっと、切に感じた。それは思い出した、と言ったほうが適確かもしれない。

世界には、変えられない流れがある。そしてこれから彼が経験する物語も、またその大きな流れの一つ。時代に揺さぶられる少年は、

自己を確立できないままその「家」に向かう。

そこに待ち受ける現実を、何一つ知らずに。

第二章 別れの選択(1)

全ては、シナリオ通りに進み、シナリオどおりの目的地へと到着する。作曲者が創りあげた未来を謳うスコアを、しかるべき奏者がしかるべき演奏により紡いでゆくように、そこにはあまりにできすぎた彼の「未来」が存在した。

屋敷を出る二日前、ケイン・セリオーズ宛に届いた封書はもう一つあった。

「カルサトールアベリア国軍准将、ヴァルツ・ブツフォより…いいにくい名前だなあ」

ケインはそうつぶやきながら封を切る。頭の中では「ブツフォ」という名前のせいで頭にこびり付いた、「白くてもさもさした髭を手櫛で整え笑っている」老人像を浮かべながら。封筒の中には小難しい単語を無駄に使った国からの文書が入っており、それを軽く読み終わった後に封書の送り主である「准将さん」からの簡単な手紙も入っていることに気づいた。あまり美しくない字で書きなぐったその文章は、内容もあまり丁寧なものではなかった。

ケイン・セリオーズ殿

ども、元気にしてますか？そのまえにはじめまして。一緒に同封されてる紙は、まあ気になったら見といてください。クロツカ・ベルセーシュのもとへ行くとききました。電話番号を載せてるので、そっちに着き次第連絡ください。迎えにあがるから。それじゃー、よろしく。ヴァルツ・ブツフォより。

「あれが一番大事な紙だと思うけどな…」

読み終わってすぐに、ケインの頭の中の髭のおじいさん像は消えた。

そしてひとつ溜息をついてから、誰にも気づかれないところにその封書をしまった。

全ては、シナリオ通りに進み、シナリオどおりの目的地へと到着する。称号の剥奪なんて当たり前のこと。セリオーズは今や保護者のいない「彼」、一人だけになってしまったのだから。そしてこの封書が、ケイン・セリオーズのこれまでの計画を完成させる、決定的なものとなった。

出兵命令が、下った。

朝一番で出発した馬車は昼過ぎに町を三つ四つ越えたところにある郊外で足を止め、二人はクロツカの敷地に到着した。「家」は彼女の土地である、目の前に広がる森の中にあるという。馬車はここから先に進むことができないので、歩いていくしか方法は無い。

「うわあー…すぐく大変なところに住んでるんだね、クロツカさんって人。僕たちみたいなお子どもを何人も預かってる人なんですよ」

「そうだよ…今はこうしないと、暮らしていけないんだろうな」

ケインが言う。エリックは首をかしげる。ケインはそんなエリックに向かって、「そのうち判るよ」と笑った。ふたりは歩き辛い細道の中、重たい荷物を抱え慎重に前に進んでいく。

「エリック、持とうか」

「大丈夫だよ！自分の荷物だから」

「少しくらい兄らしいことをさせてくれよ、ほら、俺の荷物が片手だけなのにお前がそんなにたくさん抱えてたら、いじめてるみたいじゃない」

「いじめてるもなにも、だって僕、一応、召使いだしさあ…」

「ほら、兄さんから弟への素晴らしい思いやりを受け取っておくれよ」

ケインの“美しい兄弟愛”を熱演する冗談に、エリックはなんだか

少しきまりが悪くなって、

「うーん…わかった。…じゃ、これ頼んでも良い？」

自分の持ち物の中で比較的軽いものを一つ選んで、遠慮がちにケインに渡した。

「よろしくね」

「お安い御用で」

今まで意地を張って我慢していたわけではないのだが、そう重くもない荷物を一つゆずっただけで、エリックは随分楽になった気がした。

第二章 別れの選択(2)

森は、見た目ほど大きく広がっているものではなかった。歩き進むにつれて、少しずつ木陰から落ちる光の量は増えていき、そこからしばらく行かないうちに完全に陰から自由になった土地と、そこに立つ一軒の家を見つけることができた。

「あれが……」

「エリック、あれ、誰かいるよな」

「うん、男の子」

進行方向上にエリックより年下だと思われる男の子が、二人をじつと見つめていた。それからすぐに身を翻して、家のなかへと走り去った。

「クロツカさーん！なんか来たよ！」

家のほうで声がある。さっきの男の子だろう。

「なんか、って、いわれちゃったね」

「そうだな」

言い回しに思わず笑うエリック。その顔を見てケインも一緒になって笑う。顔を見合わせて笑いあうのは、久しぶりじゃないだろうか。「やっと来たわね、始めまして」

家からエプロンをつけた女性が現れた。三十代：だろうか。スマートだが筋肉質な体格に、短い暗めの茶髪、きりりとした厳格な表情。そして、

「金色の、瞳……」

エリックは目を見開いて、思わず小さく呟いた。マリア・ジゼルとカルサトルアベリアを一目で見分けることのできる、唯一の違い。たったひとつの違いが、一瞬で人間を緊張させるものだ。特に、この時勢では。彼女の姉がわざわざジゼルの乳児院へ勤めている理由はまさにそれだった。そして、ケインが言っていたとおり、家を囲む森の理由もエリックはすぐに理解することができた。わざわざそ

うするのではない。そうしなければ、やっていけないのだ。

「さあ、とにかくお入りなさい」

扉を開けると、無理やり取り付けられた二つのベルがぶつかり合い、カランカランと弾んだ音を響かせた。

狭い一軒家に客間など無く、二人は簡単に片付けられたダイニングに通された。家の外からは、小さな子供たちのはしゃぎ声が聞こえてくる。きつとさっきの男の子もあの中で遊んでいるのだろう。椅子に座った二人に、クロツカは冷たいお茶を出してくれた。ハーブティーだろうか、強めの香りが体の疲れを追いだしていくようだ。

「ファイアツカから聞いているよ。あなたが…エリックね。ケイン、あなたは一度会ったことがあるわね」

「え？そんなことは…」

全く覚えの無いケインに、クロツカは笑って言う。

「一度だけ、あるのよ。覚えてないかもしれないけれど。今は髪型を変えているから、姉さんと簡単に区別がつくけど、昔は性格以外まったく同じ姿だったからね。彼女が急用でどうしても出かけないといけないとき、一度お宅へ働きに行ったことがあるわ」

確かに、髪型が同じだったら、見分けはつかないだろう。しかし、ケインは思った。この性格の違いはどうしたものだろうか。姉のファイアツカはもつと、ふわふわ、とか、にこにこ、とかいう印象なのに、この人はふわふわ、どころか エリックは気づいていないかもしれないが、彼女のエプロンには、捌きたての魚か肉の血が飛び散っていて、どういう粗い包丁使いなのか知らないが、その、少しだけ、……恐ろしい。

大丈夫かな…と、ほとんど聞こえない声でつぶやくケイン。エリックはおびえているのだろうか、それとも始めての場所に緊張しているだけだろうか、椅子に座ったまま固まっていた。

「ああ、そうだ…クロツカさん、電話をお借りしても良いですか？
連絡しておきたいことがあって」

思い出したようにケインが言う。

「はいどうぞ、部屋を出てすぐ左にあるから、使っておいで」

「ありがとうございます」

ケインが立ち上がるとエリックが目覚めたかのように、「どうしたの」と訊く。ケインは「ちょっとね」と一言だけ言い残して部屋を出た。

第二章 別れの選択(3)

「えらい子だね、ケインは」

クロツカは一口お茶を含むと、エリックに向かって微笑む。エリックは思いがけないことを言われて少し戸惑ったが、すぐに「はい」と応えた。

「ケインが電話している間に、今日から暮らす部屋を教えようか。早く荷物を片付けてしまいたいでしょ」

「あ、はい、おねがいします」

エリックが通されたのは、書庫にベッドを押し込んだような部屋だった。狭い部屋だが、彼にとっては本棚があることが一番うれしい。さっそく持ってきた本も棚に詰め込もうと荷物を運び入れたところでケインがやってきた。

「へー、すごいとこだな、お前の部屋。今日からここで暮らすのか。驚いた表情のケインに、エリックは嬉しくて、弾んだ声で応える。

「うん！ケインの部屋はどこなの？」

「あ、ああ…その」

ケインの表情が揺らいだ。エリックはその揺らぎを敏感に察知して、何かあったの、と目で尋ねた。

「あのな、…無いんだ」

「え、」

「無いの、俺の部屋」

時間が固まる。外で遊んでいる子供たちはしゃぎ声が遠のいていく。

「…無いって、何で」

「称号をね、やっぱ剥奪されちゃってさ、…一昨日、出兵命令が出たんだ。地位も平民と同じになった。だから、トート戦争に行くよ」「戦争って…」

これからの生活が幸せで楽しいものになるなんて、端から思ってい

なかった。だけど、それとこれとは、話が違う。違いすぎて、なんだか よく判らない。

「もう決まったことだ。取り消せない」

「どうしてケインだけ…！僕だって、行かないと」

「お前には…関係ない、ことだ。だって、お前は、敵国との、ハーフだから」

瞬間、エリックの頭の中で全てが繋がった。ケインが、「エルシス・セリオーズ」を殺した、もつとも大きな理由が。

「もうすぐヴァルツ・ブツフォ准将が迎えに来る。そしたら俺は、トート戦争で戦う。お前は留守番だ、エリック。分かるね？」

「分からないよ！だって、なんで ケイン！ケインがいなくなったら、僕は何であればいいの！分からないよ！どうして僕は エルシスのままではいられないの、なんて、訊けるはずがない。そうだ、全ては彼の言う通りなのに。あの状況まで進んでしまったところで、エルシスを語ることは危険すぎた…そんなこと、判っている。判っているけれど」

「…もう、どうしようも、ないんだ」

エリックの頬を涙が伝う。それを見たケインの、硬く堪えている涙の線が少し緩む。辛かった。ケインはこの日が来るまで、このことばかりをずっと考えていて、何度も頭の中で“こんな風になる”、を繰り返していた。繰り返していたけれど、覚悟していたけれど。その辛さはすこしも減少しなかった。

「エリック、お前はエルシス・セリオーズじゃなくなった。いや…そうじゃない。お前は…エリックになるんだ。全部忘れて良い。母上のことも、エルシスのことも、全部」

「意味が、判らないよ」

第二章 別れの選択（4）

とんでもないことだ。家族を忘れて、家柄を忘れて、ケインはいつたい何を考えて、どうしてここまで大きな計画を進める気になったのか。いや、全てわかっている。だけど判らない。どうして彼がそこまでして、エリックを解放したがるのか。確かにエリックの「エルシス・セリオーズ」の記憶はあまり楽しいものでも、美しいものでもなかった。思い出せば、思い出すほど　しかし、それはきつと、どこに行っても変わらないだろう。世界はどこも、楽しいものでも、きれいなものでもない。そんな中で一番の「家族」と呼べる人を、唯一の頼れる人と離れなければならぬなんていうことのほうがよっぽど苦しいに決まっている。

「進む道も考え方も、誰にも振り回されなくて、自分で選んで、自分の好きなように、生きていい。自立して、好きなように生きていいんだ」

エリックはしばらく泣き止めなかった。無意識のうちに判断した自分が使える最高の抵抗能力が、そうすることだったから。体が諦めるまで、それをやめられなかった。そうしてどれだけだっただろうか、体が諦めはじめ、泣き声が止みだしたころ、沈黙していたケインが再び口を開いた。

「俺だって、自分でこうなることを選んだんだから」

「…ケインが？」

「そう。…こつちのほうが良いんだよ。ずっと何も知らない貴族でいるよりさ。罪滅ぼしじゃなくて、少しでも人の役に立てるなら、称号なんて要らない。自分ができることをやりたいと思った。エリック、お前のおかげだ。お前がいなかったら、こんな風に思うことは無かった。今頃、母上みたいに何も知らずに　あの人も色々あったのだろうけど　あんな風に、終わっていたと思う」

「僕は何にもしてないよ…だって…」

言葉の続きを、ケインが首を振ってさえぎった。そして一言、「ありがとう」と漏らすと、静かにドアを開けて部屋を出ていった。

ケインが部屋を出て行った後も、エリックは今言われたことをまだ完全に理解しきれずにベッドに座り込んでいた。何もできない自分の不甲斐なさにただ絶望していた。というよりも、エリックが今まで生きてきた中で「何かしないといけない」ことがほぼ皆無だったため、彼は手も足も出ずに呆然と時間が過ぎていくのを待つことしかできなかった。口を出さず、なるがまま、あるがままに生きる

今まで、それが彼の役割だったから。そうやって生きることしか、教えられてこなかったから。

いつからだろうか、ふと窓を覗くと、夕立が降り始めていた。あまり強い雨ではなかったが、窓に映った灰色は、エリックの気落ちをさらに促進する、絶好の演出家となった。はあ、と息を漏らして、視線を腰掛けたベッドの真っ白いシーツに戻す。シーツを少し握り締めて、また手を放す。そして溜息。それをもう何度繰り返したことが。

「僕ができること……って、何だろう」

つぶやきと同時に玄関の呼び鈴が音を立てた。彼らの気持ちとは裏腹に、カランカランと　あまりにも明るく、弾むように。

残酷な合図が、家中に響き渡った。

第三章 大将さまと准将さま(1)

夕立が降りだした。あまり強い雨ではないのだが、馬車にうちつける不規則で不快な雨粒のリズムと、雨が降り出すと生じるこの土地特有の酷い湿気のせいで、元々我慢を苦手とするその乗員の不快指数は限界を超えかけていた。

「はあーあ、こういうときに限って、タイミング悪いよね」

カルサトールアベリア国軍准将、ヴァルツ・ブッフオは、その称号とは思えない厳格の無さをさらけ出しつつ、湿気でむずむずする頬を人差指で掻きつつ、対に座っている部下、エリザ・トーノリ工少尉に続けて言う。「あーあ、どうして僕が人事派遣しにいかなきやならんのかね。元貴族だからって、もう貴族じゃないんでしょ？今頃ルーカス少将絶対笑ってるよ。あいつが暇そうだから行けっついでたんだよ、僕は散歩してただけなのに」と。それにエリザは苦笑いで応えるが、頭の中では「どうしてこのひとと一緒に仕事しないといけないの」と十数度目の疑問をめぐらしている。

ヴァルツは年齢さえ不詳だが、忍耐強くない性格のわりにどうしてか持ち合わせている行動力、若く研ぎ澄まされた思想、軍事における実力において、カルサト国軍最年少で准将という地位に昇りつめた新鋭だ。去年の暮れに大佐から、二十五倍の倍率という狭き門を潜り抜け、見事元帥の指名を受け准将へと昇級したのであった。本人にとつては准将だとか、ほにやらの新鋭だとかそんなことは関係なく好き勝手やっているつもりなのだが、逆に彼のそのスタイルが上司や部下、同僚の強い支持を得ているひとつの理由でもある。そんな彼の素敵なキャリアはさておき、上司と部下を乗せた馬車は橋を渡り、目的地へと進んでゆく。連絡があつてからヴァルツが（それまで本部内を放浪していたくせに）「僕ランチまだなの！」とか言つてもたもたしたせいで出発が随分遅くなつたが（夕立が振り出したのも結局自業自得だ）、元々国軍本部からこの土地はそこま

で遠くない。エリザは自身に「もうすこしのがまん」を言い聞かせていたが、この後彼女はクロツカ邸に辿り着くための最後の関門にうめき声を上げるのである。湿度百何十%の道を、駄々をこねる准将さまと二人きりで歩かなくてはならない、という。

「いったいどうして、よりによって、あんなのよ！」

困惑か怒りか、ベルが鳴ってから次に聞こえたのは、そう言うクロツカの叫び声だった。

「やーお久しぶり、大将さま。見ないうちにこんなに大きくなっちゃってー」

暢気な声でヴァルツが叫び声の主に挨拶する。隣でエリザは、ひつ、と小さく悲鳴をあげ、「え、このひと、元大将…!？」と、途絶えることの無い冷や汗を必死にぬぐっている。そのせいで、普通ならもつと気にするだろう彼らの言葉遣いへのショックが少なかった。

「あなたも随分昇級なさったようね、青二才准将どの。だけどあいにく、もう軍とは関わりたくないの。その呼び方はやめてもらえるかしら」

「それはどーも、済みませんね。…ケイン・セリオーズを迎えにあげました。それと、“エリック”も呼んでくれますか、たいしょーさん」

「大将をつけるなど言っとるだろうが。それともここへ喧嘩を売りにきたのかしら？」

「あーあ、そうだった。ごめんなさい、僕の目的はあなたじゃないですうー」

准将のわざとらしい返事によって、クロツカの米神に青筋が立ったのは言うまでもない。いや、すでに立っていた。これで二つ目だ。

そして今にも喧嘩（という名の発砲事件）を起こしそうな二人を目の前に、相変わらずエリザはおびえている。先ほど自分に言い聞かせた、「もうすこしのがまん」のおまじないはとっくに崩れ去っていた。

クロツカは二人をダイニングに通し、そこにエリックとケインを呼び出し座らせた。当然彼女はこの軍人二人を、もてなすにふさわしい人物だとは思っていないようだが。

第三章 大将さまと准将さま(2)

「君が、ケイン・セリオーズ君だね、それでこっちがエリック君か」
「ケインで良いです、爵位はすでに剥奪された身なので」

ケインが言う。表情は硬く、ヴァルツを見据えて。正直ケインの心の中では、准将がこんなに若い男だとは想像していなかった。その硬い表情は驚きを隠す要素も含んでいた。さすがに白いひげもじゃではなかったが、予想していた姿よりずっと若かったし、覚悟していたものよりずっと違って、とにかく緊張感の無いやつだ。そんな印象。

「わかった、ケイン。それで今回は君への出兵命令が出た、というわけで迎えにあがったのだけど、ええっと、エリックのほうは」
准将に名前を呼ばれたエリックは、急にスイッチが入ったかのごとく目と口を見開いて、いきなり「僕も連れてって」と言いそうになったが、ケインはそれを決して言わせなかった。

「事件の調査データがそちらに回っているのであれば話は早いのですが、こいつは事件の三週間ほど前にジゼルから買い取ってきた、マリア・ジゼルと、カルサートルアベリアのハーフの子供です。奴隷としてではなく、一人の人間としてここで世話になることになっています」

「ふうん、まあ、一応知ってるよ」

あまり興味の無さそうな相槌だったが、ヴァルツの顔はとても楽しそうだった。いたずらっこのような、心の中のたくらみを隠そうとする、しかし全く隠せていない顔。意識してやっているのか、それとも彼がそういうことを隠せないだけなのか。初対面には解らないことだ。しかし、どちらにしてもその表情がケインやエリック、そしてクロツカにとって快いものではない。

「だから、君は大切な家族を置いて戦争に行くってわけだね」

ケインはヴァルツの言い方がとても気に入らなかったが、込みあが

る怒りを静めてその訊ねに応える。

「はい…まあ、そういうことです。家族と言っても、血のつながりも全く無いけれど」

エリックとの関係を、なるべく遠ざけておかなければ。少しでも仲のよいところを見られてはならない。エリックを戦争に行かせてはならない。そういう信念だけが、今のケインを動かしていた。

クロツカは相変わらずヴァルツ准将をぎらぎらとにらみつけている。「話が済み次第さっさと出てけ」といわんばかりの、見ようによっては般若とも取れる形相で、准将の顔もあまり見たくないだろうに、威嚇の精神が消えてくれないようだ。ヴァルツはそんな彼女の恐ろしい顔も、「そんな恐い顔しないでよー」で済ませてしまい、彼女にとつてそういうところがまた腹立たしく、クロツカの瞳は次第に充血していく。

ヴァルツの質問と、迷い無いケインの言葉に、エリックは鼻先がつん、と痛んだ。たったそれだけの会話なのに、自分が遠くに置いてきぼりにされてしまった気がした。いや、今から自分が本当に置いてきぼりにされてしまうことを考えてしまった。エリックは寂しくてたまらなくなつたし、准将の態度もとてもじゃないが好きにはなれなかった。恐らく、隣でヴァルツに向かって殺気を帯びた視線を送り続けている女性ほど、憎たらしいとまでは思っていないだろうが。とにかく、あまり人との関わりを多くもたないエリックであるが、彼はきつと、苦手なタイプの人間なのだと思つた。

エリックがケインにろくな話もできないまま、別れの時間は刻々と近づいていた。ケインはこれから、このわけのわからない人たちに連れて行かれて、この人たちの下で戦わなければならなくなるのだ。そう考えるだけで、吐き気がする。最近「花嫁が望まない結婚式の途中、誓いの儀式が終わる寸前に本命のヒーローにさらわれる」といったロマンス（はたから見ると、とんでもなく興ざめな）を暇つぶしに読んだが、まず自分にこれはできないだろう。

…そもそもケインは花嫁じゃない。

第三章 大将さまと准将さま(3)

「じゅ、准将、そろそろお時間です」

エリザの言葉に、エリックはびく、と小さく反応した。ケインはそれに気づき、表情を曇らせた。クロツカも気づいていたが、彼女の表情は変わらなかった。

「ほんと。早く戻らないとまた怒られちゃうや。それならそろそろお暇しますね、大将」

彼の前例に、その場の誰も疑問を持たない。

「そうね、早くお帰りなさい。ママが待つてるわよ、准将」

皮肉たつぷりに言うクロツカ。それに対して、にやにや笑いながら「はあい」と准将は応えた。

彼らが外に出たときには、いつから降り始めたかわからない夕立も止み、地面が乾きかけているところだった。子供たちのはしゃぎ声も再び戻ってきていた。馬車に乗る三人。見送る二人。全員無言だったが、三人が馬車に乗り込んでからクロツカが口を開いた。

「ケイン」

「はい」

「あいつに振り回されないようにね、体に気をつけて…いつ逃げ出してもいいのよ」

元大将のそんな発言に、その場にいた者は目を丸くした。ケインは小さくはにかみ、

「大丈夫です、逃げませんって。…大丈夫、です」

そう答えた。自分で選んだ道だから。エリックのためにも逃げることはできない。したくない。こうするために、今までやってきたのだから。そういつた意志をこめて。

「エリック」

「…はい」

ケインに呼ばれたエリックは余所余所しい返事で応える。二人の軍

人に関係がばれてはいけないから。そして、自分を置いて戦いに出るケインに対してなんて応えたらいいか、わからないから。

「俺が持ってきた荷物、あの鉢だけど、お前が世話してやってくれ。それで俺が死んだら、どこか好きなところに植えて、それっきりにして構わないから」

「そんなこと、」できませんと言おうとしたエリックを、ケインは言葉で封じた。

「いいや、それじゃ駄目だな。必ずどっかに植えるんだ。それで、まあ、世話ができないところにも、行ってくれ…それが、お前の最後の仕事だ」

「でも…」

「な、エリック」

「…はい」

ケインはそう言って笑うと、不安げなエリックの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「それじゃあもう出すよ、ケイン」

「わかりました…エリック、元気で。クロツカさん、こいつを宜しくお願いします」

「人の心配をする前に、自分の心配をしてやりなさい」

「はは、そうですね、それじゃ、」

固まっていた車輪が、動き出した。

結局、ヒーローは現れなかった。残ったのは、ケインが残した植木鉢だけ。彼は本当に、なにも、ここへ持ってきてはいなかった。それはまるで、彼の迷い無い意志を強く表現しているかのよう。それとは逆にエリックの気は重くなった。部屋にこもり、ベッドにうづくまる。クロツカは馬車が発ってから、暗い表情のエリックに対して「家に入るわよ」と言ったきり、何も話しかけてこなかった。

日が落ちる。気づけばろくに物を食べていない。

「おなか、すいたな」

ケインが居なくなっただという一大事の直後にそんなことを思ってしまう自分を怨むと同時に、その意思をなんとなくクロツカに話しかけるのが恐くて、それに　あの瞳の色をまっすぐ見つめることがまだ出来なくて　エリックはただ時間が過ぎていくのを待っていた。

そういえば、セリオーズの家を出る前にケインからもらっていたものがあつた。鞆をあさり、出てきたケースを開けて、薄いリーフグリンのレンズの眼鏡を取り出す。細部に宝石が埋め込まれているから、相当値が張っているものはずだ。ケインはエリックの瞳の色のことを心配してこれを贈ってくれたのだろう。そして、必要でなくなつたとき、いくらかお金に換えられるものとして。そんなこと、出来るわけがないけれど。

レンズを通して、白い壁が薄く緑色に染まる。　森みたいだ。静かな森の中に、ひとりぼっち、置いてかれたみたいだ　そうして目を細めているうちに、エリックは眠りについた。たいしたことをしていないのに、とても疲れていた。

第三章 大将さまと准将さま(4)

リリリリ、リリリリ、

「はい、こちらマリア・エステラ乳児院です」

カルサトの隣国、マリア・ジゼルの乳児院で、一人の看護婦が受話器を取った。

「フィアツカ・ベルセーシユを呼んでください」

「私よ、クロツカ」

「ああ、姉さん、今日エリックとケインが来たの。ケインはもう連れて行かれた。……ヴァルツ・ブッフオに」

「そう、もう行ってしまったのね……。相当な覚悟だったでしょうに

……あなたもよ、クロツカ」

「私は、大丈夫よ」

「罪悪感でいっぱいだった」

「まあ……そうね。自分の子でないにしろ……大嫌いな軍人に、子どもをひきわたすなんて。昔だったら頭がどうかかってたわ」

少しの沈黙が流れる。

「……ねえクロツカ、だからヴァルツさんだったのかもね」

「えっ!? あ、あんなのが関係あるわけないでしょう!」

慌てるクロツカ。フィアツカは遠くはなれた受話器越しのクロツカの顔が鮮明に想像できた。

「感謝しときなさいよ。絶対行きたくないなんて言っておきながら、断りもせずにわざわざ来てくれたんだから」

あなたの罪悪感を少しでも紛らわすために、とフィアツカは続けた。

「そう、ね、もしかしたら……ってそんなわけないじゃないの!!!」

「うふふっ」

馬鹿みたいに火を噴いているクロツカの顔が元に戻るのに、とても長い時間がかかった。

「……エリックはどう? 大丈夫そう?」

「まだわからないけど、相当落ちこんでるはずよ」

「当たり前よね…色々大変でしょうけど、宜しく頼むわ。こっちもこれからしばらく帰れないみたいだし」

「わかってる」

「…ねえ、クロツカ」

「何？もしかして、気になるの？」

「えへへ、在り得ない話だけど、変なところで期待しちゃうのよねえ」

「そうねえ、もし本当にそういうことで、考えるとしたら…あいつのほうね」

「えー、そうなのね。会ってみたいなあ、いつか」

「それじゃあ、また連絡するからね」

「はい、よろしく」

クロツカは電話を切り、ふとエリックのことが気になり廊下に出た。彼の部屋のドア越しに明かりがついたままだということに気づき、そっと覗くと、布団もかけずに寝ている彼の姿があった。

「そりゃ、まいるわよね…」

布団を掛け、眼鏡を外してあげると、彼の顔に二、三筋の涙の跡を見つけた。

明かりを消したクロツカは、溜息をひとつ零すと、静かに部屋を後にした。

第三章 大将さまと准将さま(4) (後書き)

はじめまして、こんにちは。佐伯夜世です。

お立ち寄りいただき本当にありがとうございます！

この作品は、ちょうど去年の今頃から構想を練りだし今年の二月からサイト上にて連載をスタートさせた、初めての長編小説です。

本編はまだ続いておりますが、今のところ十四話完結で手元に十三話まで出来ています。必ず終わらせますので、どうぞよろしければお付き合いください。

第四章 動き出す者たち（1）

コウノトリは飛び立った。

飛び立った瞬間、ふたつの狭間になにかを見た。

扉の向こうに置かれた手紙の内容は大抵察しのつくものだったが、

一応読んでみたところ、昔の自分の字が刻まれていた。

コウノトリは振り返る。ゆりかごに預けられた子供の瞳を思い出す。そして再び気流に乗ると、遙か遠くへ飛び去った。だれも知らないところへ、だれも、気がつかないだろう場所へ、飛び去った。

「どうしたんだヴァルツ、机と書類はお前に向いてないぞ」

「酷い言われようだ…ねえルーカス少将、やっぱりなんか変なんですよ」

調査書の保存されたファイル、およそ十二冊×二の塔の隙間からヴァルツは顔を覗かせる。ルーカス少将と呼ばれた四十代後半の男は、右手で白髪の混じった無精ひげを搔きながら面白そうにヴァルツの作業を見ている。

「何かおかしなことでも見つけたのか？」

「今更だけど、セリオーズの事件がね、気に食わない。時系列が、うまくかみ合っていないっていうか…」

「それで…警察部の資料をごっそりお預かりしてきたってわけか」

「まさにそのとおりです…けど、あまり時間もかけられなくて」

「今からの個人調査はちよつと難しい、とな。当たり前だ。しかしお前も変なところに興味を持ちたがる」

「戦で人を殺すより、僕は謎解きの方が好きなんですよ」

「はははっ！名探偵ヴァルツか。見た目も頭脳も青二才 さぞ面白いコメディだろう」

「そんな、冗談言っていないで！ね、ルーカスしょーしょ。誰かいい人居ませんかね」

「ならば…ハインツ・エファサン中佐はどうかね。あいつは頭がきれるぞ」

エファサン、という名前を聞いた突端、ヴァルツの瞳が急激に輝いた。

「本当！？あの！インテリ野郎！！？いいんですか！」

「ああ、あいつもお前に、えらく信頼を寄せていると聞いたよ。いい機会だ。午前中は新しい隊の教習に就いているだろうから、昼になつたら来るよう言っておくよ」

第四章 動き出す者たち(2)

あいにくその部屋には時計が無かったため、彼は自分が目覚めた時間も把握できずにいた。窓の外を覗けば例の如く子供たちが遊んでいる、日はだいぶ高く昇っていた。昨日、何時に眠りについたのだろう。どれだけ眠ったのだろうか、と、一応考えてはみるが思い出すことは無い。覚えているのは、自分はとてもおながすいていたことと、昨日寝入って、一度起きて手の届くところにちょうどあった椅子に眼鏡を置いて、いや、それもない。自分で眼鏡を外した記憶すら無かった。

エリックは頭を掻いて、あくびをして、ベッドの上でもぞもぞと四つんばいの状態になった。起きる気にはなれなかったが、これからまた眠る気もしなかった。そして二度目のあくびをしたとき、「ん？」

急に足元に本のカドがあたる感じがして、片付けそびれていた植物図鑑を見つけた。セリオーズ邸で何度も読んだ、もう内容もほとんど覚えていた本だ。ぱらぱらとページをめくり、見慣れた写真たちをぼう、と眺める。こうしていたらまだセリオーズの屋敷にいるんじゃないか、そう勘違いしてしまいそうだったが、

「ちがう…ここは、」
意識が少しずつはつきりしてくる。そうだ、ここは、家ではない。

ケインも、いない。

先程お腹が空いていたことを思い出し、目覚めた体もそう訴え始めていることに気づく。

「どうしようかな」
素直にクロッカに「おなかすいた」と言えばいいことなのに、なんとなく、出来ない。「おなかすいたって言っても、ぶたれないよね」と自分に言い聞かせて、何言っただと自分を馬鹿にしてみる。そしてとりあえず椅子の上の眼鏡をかけ、部屋を出る。ダイニングと

キッチンを見渡したが、クロツカの姿はどこにも無かった。

「……どうしよう」

どこかに外出しているのだろうか。エリックは少し困惑して部屋を見渡す。掛け時計を見つけて、その針が一時過ぎを指していることを確認する。もう一度部屋に戻って、あのトラウマになりかけているベルの音を待つしかないか、なんて思っていたとき。

どこからか、ピアノの音が聞こえてくるような気が　いや、違う？　いや、ピアノだ。そっか。だれか、いるのか。とたんに安心して、すぐにまた不安を感じる。ここにどんな子どもたちが、暮らしているのだろうか。どういった経歴で、集まってくるのだろうか。…僕は、いつまでばれずにここにいられるのだろうか。

不安をよそに、ピアノの旋律は美しかった。ラジオの音ではない。遠くから鳴っているのに、音が粒になって、細かく転がってゆくさまがはつきりと判るこの音は。ぼろぼろと、心にしまっておいたものが少しずつ零れて、弾けていくような　どこか変だけど、不思議と自然に思える奏法。

「なんだろ…聴いたこと、ある曲だ」

この家のどこにピアノを収納するスペースがあるのだろうか、と疑問に思いながらその音色のほうへ足を進める。階段…二階があったのか、この家に。驚きながら階段を上り、恐る恐る音源の部屋のドアを開けてみる。磨きのかかったグランドピアノが、部屋ぎりぎりに詰め込まれているのと、そこで今演奏している少女を見た。

「エリックは昨日来たのよね。まだ誰とも話してないの？」

「うん、クロッカさんだけかな」

「だったら私が最初の友達ね！あ、一緒に暮らすんだから、家族だね」

「そうだね」

ピアノを弾いているときの姿と相変わって、話せば明るく可愛い女の子に、にこりと微笑を返すと、ライネは少しだけ頬を赤らめた。

「あ、ブルーベリーもあるのよ。ヨーグルトと一緒に食べたらいしいんだから」

「うん、ありがと……」

スプーンでブルーベリーを何粒か掬い、そのままヨーグルトの皿に入れようとしたとき、突然、扉が勢いよく開かれた。

「ライネ！ぼくさつきからこんな暇をもてあましているのに、ライネはどうして相手をしてくれないの、弟よりも恋人のピアノのほうが大事なのかあ……って、誰？」

ドアを突き破るかのごとく開いたのは、まだ幼い少年。相手に指をさして文句を言ったはずなのだが、その角度を少し間違えたらしく、少年の人差し指はライネではなくエリックを指していた。

「え？あれえ？」

「シエロ！まったくあんたは失礼なんだから。エリック、この子は弟のシエロ」と言っただけで、「シエロ、昨日来たばかりのエリックよ」、と付け加えた。

「ああ、君は……」

エリックはシエロと呼ばれたこの少年に「クロッカさんなんか来た！」といわれたことを覚えていた。その少年が、エリックをじろじろ見つめながらゆっくりと近づいてくる。スプーン上のブルーベリーは上手いことヨーグルトの皿に着地した。シエロがの額とエリックの額があと数センチでぶつかるのではないかとエリックが心配になるまで近づいて、ひらめいたように言った。

「あっ、そういえば、昨日見たよね！もうひとりお兄さんがいたで

しよ！ぼくがクロツカさんと呼んであげたんだ！」

「うん、僕も覚えてる」

「そりゃね、ぼくのおかげですもの！わははっ」

腰に手を当てる大口を開けて笑うシエロに、ライネが言う。

「あんた、どうでもいいことに得意気ね。ついでに、クロツカさんがどこに行ったか知らない？」

「知ってるぜ！ブランの店。多分、今日は夕方まで帰ってこないと思っよ」

「そっかあ…。エリック、そういうわけよ」

「ブランって、誰のこと？」

そう尋ねるエリックの前で、きょうだいは顔を見合わせてにやりと笑った。そして再びエリックに向くと、口をそろえて言った。

「こ、い、び、と…」

だれも確かめたことの無い、確かめられるはずも無い、勝手な情報を。

第四章 動き出す者たち(4)

「へ、へ、ぶえつくしい！」

「大丈夫？ブラン、どこかで噂されてるんじゃない？」

シエロの言う通り、昼間の酒屋にクロツカは居た。そして、酔っていた。

「そんなことよりクロツカ、お前さんまた新しい子どもを預かったんだろう？こんなところで酒飲んでて良いのかい」

「もう二度と来ないわよ！そんなこといったらねえ！」

酔ったせいで少しばかり気が荒くなっているクロツカを、まあまあとブランは静めさせた。

「それよりよく知ってるわね、ブラン」

「まあね、郵便屋のマルテスを知っているかい、あいつはすごい情報持ちだよ。…だが、召使いを保護させるなんて、ちょっとおかしいよな。伯爵家ってえ、どういう価値観なんだ？」

「あんな事件よ。いいじゃないのよ！あの子たちにも色々あったのよ！」

「ほらほら、すぐにカツとなるんだから…ちょっと落ち着いてくれよ」

「あの子はねえ…自分が人に生かされているってことを、ずっと感じながら生きてきているんだから…わかるでしょ…ねえ…」
そう言いながら、彼女は眠りについた。

「たく、特別飲めるわけでも無いのに、すぐ強いやつ冒険したがるからなあ…もう、飲んでる時間より寝てる時間のほうが多いってのなんの。あ、いらっしやい」

眠る彼女のことなどつゆ知らず、三人連れの客が店にやってきた。

「久しぶりだね、ブラン」

「ああ、久しぶり、ヴァルツ…と部下さん方。今日はもうフリーなのかい、准将さん」

「仕事中ですよ！じゅ、准将！いいんですか？！」

「おやおや、相変わらず」

馴染みの客の久々の来訪にブランは笑う。彼の言う「相変わらず」は、本当にそのままの意味だった。ヴァルツは以前にも、こうして仕事中にこっそり秘密の会議だとか言っただけで部下を連れて酒を飲みに来ることがあったのだ。

「きつとこれには准将の深いたくらみがあるんですよ、トーノリエ少尉。そうですね？」

「そうそう、さすがハインツ中佐！君はよくわかっているね。ささ、エリーゼ少尉も席に付きなさいったら」

「エ、エリザですよ！エリザ・トーノリエです！」

「はいはい、お殿さま」

「そんな、中佐まで！？中佐はネタでもそんなこと仰らないと思っ
ていたのに……」

おそらく准将に対する昨日のあの緊張は、全ての原因・ルーカス少将の呼び出しがいきなりすぎて、何も知らずに准将に対面したせいだったようだ。そう考えられるほど、エリザは二日目にして、少しだがリラックスした状態で、どこまでも型破りなヴァルツと会話できるようになっていた。ヴァルツ准将はそんなエリザと、またもやルーカス少将が呼び出してくれた“インテリ野郎”のハインツ中佐を仲間に入れ、セリオーズ伯爵家の事件の真相を解き明かそうとやる気満々のようである。

一方店の主人であるブランはにとっては、クロツカとヴァルツの仲が犬と猿、はたまたコブラとマングース（クロツカが一方的に威嚇するのだが）だということを知っていたため、店が破壊されないために彼女が起きてくれないことを祈るばかりだ。しかしその後、店主の想像よりも早く、カウンターで寝ている彼女を、約二名の軍人が知っている人だということに気付き、猿と呼ぶかマングースと呼ぶか　とにかくヴァルツの方がちょっとかいを出して大変なことになるのだが。

兎にも角にも、三人の調査はこの日から動き出すこととなる。そして、もうひとつの企みも。

第四章 動き出す者たち(5)

「あの、クロツカさん」

「どうしたの、エリック」

クロツカが眠りから覚め、(准将のせいだ)めっちゃくちゃになったブランの店から帰ってきた頃。空一面は真っ赤な夕焼けが支配していた。てきぱきと夕食を作っているクロツカの酔いは覚め、先ほどの出来事も半分以上忘れていた。機嫌はよかった。

「あの、僕…なにか役に立ちたいと思つて。なにかつていうと…庭の手入れ位しかできないと思つのですが…」

エリックがおずおずと話しかける。その気持ちは本物だった。世話になるのだから、何か出来る事をしたいと思つていた。そのようにしか喋れなかつたのは、まだこの女性がよく判つていなかったことと、やはり少し怖く見えてしまったためだった。それに対し、彼女はにこやかに微笑み、

「ええ、勿論。昔から男手が欲しいと思つてたのよ！」

エリックはそこまで聞いてほつとした。そこまではよかつた。

「もうちよつと庭を広げたくつて。でもやつぱり私ひとりじゃ、家を作るのにあそこまでしか樹を切り倒せなかつたのよ」

「…え？この家つて」

「昔ね、私と姉さんと、その旦那と建てたわよ。旦那さんが設計士でね。貧弱ものだったけど、あの時ばかりは役に立つたわ。家に適した種類の樹が多いつて言つて、この土地まで選んでくれのよ」

「へ、へえー…、そうなん、ですかあ」

「うふふ、本当になつかしいわねえ…」

旦那さんが貧弱ものだったつて、それつて、えーつと…この人は一体、一体何者なのだろう…そうエリックが考えている間に、クロツカは昔の懐かしさに浸りこんでいた。

「ああ！そうだったわ、エリック」

「な、なんですか？」

「ケインが置いていった植木鉢、ずっと室内じゃ可哀想だから、あれもたまには庭に出してあげなさいね」

「あ…あの、はい…！ありがとうございます…」

「そんな簡単なことで丁寧に感謝しなくても良いのよ、もう、みんな家族でしょ」

「はい…。…家族、ですね」

ケインの顔がエリックの頭に浮かんで、すぐ消えていった。

クロツカという人は、本当は良い人なんだ。やさしいひと、なんだ。

…普通の人と常識がちょっとズレてるだけで…と、彼女について彼なりに簡単な納得がついた頃。

空一面に星が現れ始めた。もうすぐ彼の、新しい家族と共にする、初めての夕飯だ。

第四章 動き出す者たち(5) (後書き)

読んでくださり、ありがとうございます！

前回の投稿から時間が経ってしまい大変申し訳ありません。

四章はこれにて終了となります。まだまだ続きますので、宜しくお願いたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3040i/>

セリオーズの亡霊

2010年10月18日13時42分発行